

子犬みたいにかわいい系の男の人がタイプなはずなのに……！

厳つい見た目で、冷たい態度の真紘さんのことは、苦手なはずなのに……！

関われば関わるほど、いい部分が見えて、惹かれていく。

真紘さん、案外いい人……かも？

1「素直になれない悪い子だな。ひよりの体がどれだけダメなのか、教えてやるよ」

「ひより、今日もちっさいな」

「ちゃんと勉強したのか？」

「もっと食わないと、骨折れるぞ」

そうやって、会うたびに私をからかってくる2個年上の真紘さんは、隣の大学に通っていて、ゆりの彼氏、陸さんと仲がいい。

ゆりは、今入っている、フットサルのインカレサークルに誘ってくれた私の親友。

まあ、ゆりは、陸さんのサッカーしている姿を見られるという理由で、入りたかったみ

ただ……。た

真紘さんと、陸さんが所属するサッカーサークルの隣で、私たちは、いつも練習して、ゆりは休憩中によく陸さんを見ている。

陸さんは、彼女がいると、知れ渡っているみたいで、女の子が群がったりしないのだが、真紘さんはすごい……………。

いつも数人の女の子が練習している真紘さんを見てキャーキャー言っでは、練習が終わった後に群がっている。

「今日もすごいなあ……………」

「ね」

ゆりと夕飯を食べて帰ろうと、帰りの準備をしながらふと、隣を見ると、金曜日だからなのか、いつもより多い人数に囲まれてる真紘さんがいた。

本人は、女の子を無視して、陸さんと帰る準備をしている。

「やばいっ！ゆりっ！急いで……………」

「へ？なんで？」

「陸さんたちきたら、また真紘さんの囲い女子に嫌味言われるじゃん……！」

「気にしなければいいじゃん。事実、ひよりは真紘さんのオキニなんだから」

「私はやなの！」

そんな言い合いしているうちに、帰り支度を終えた陸さんがゆりのそばに来ていた。

「今日も、ひよりとご飯行くの？ゆり」

「もちろ。〜人でご飯食べて、ちよつと勉強して帰る〜。陸たちは？」

「俺と真紘は、もうちよつと静かなところに移動して、自主練して飯食って帰るよ」

「おっけ〜」

「早く行こっ……ゆり」

ゆりの手を引こうと繋いだ瞬間、頭をポンと叩かれる。

「おい、俺から逃げてんの？」

捕まった。

しかも、頭をポンポンされてしまった。

普通の女の子ならこんなイケメンに頭をポンポンされたら嬉しいかもしれない。

でも、私は違う……………。

お父さんもおじいちゃんも、子犬みたいにいつも陽気で口調も優しいタイプ……………。

それもあるって、好きになったり、付き合ったことのある人は、みんな身長がそんなに高なくて、子犬みたいに可愛いタイプ……………。

真紘さんは真逆のタイプだし、真紘さんの近くにいるだけで、女の子に敵意を向けられるから苦手だ……………。

「ち、ちがいます……………よ」

「あーあ、また、真紘が、ひよりのことビビらせた」

「こいつが勝手にビビってるだけだろ？」

最初は、今より怖がっていたけど、サークルの練習終わりにちよつとだけ話す習慣がで

きて、少しだけだけ慣れてきた。

流石に無視するのは最低じゃん……。

「いこつ……ゆり……」

「はいはい。またね」

「おー」

真紘さん、陸さんと別れて、ゆりといつも行ってるご飯屋さんへ向かう。

「今日は何食べようかな。ひより決まった？」

「んー、餃子定食！」

「おけ、私決まったら一緒に頼むね。てか、最近インフル流行ってるらしいよ。ひより、一人暮らしなんだから気をつけなよ」

「ほんとだよね……一人暮らしだと病気になった時、ほんと大変……」

「まっ、物資は私が届けてあげるからね」

ゆりとそんな話をしていた数日後、見事インフルエンザになってしまい、数日間寝込んでしまった。

「はあ……………久しぶりのサークル参加だ……………」

なかなか体調が良くなりなくて、2週間くらいサークルに参加できていなかった。

大学、リモートでも授業受けられて良かった……。じゃなかったら単位落としてたかも…………。

今日は久しぶりに体を動かすので、体を慣らしておこうかなと、早めに練習場に来た。ちょこちょこ散歩はしてたけど、ガッツリ体を動かすのは久しぶりなので、少し心配。

「さすがに誰も来てないよね」

真紘さんたちが通ってる大学とのインカレサークルで、練習場所は基本的に、真紘さんの大学でやっている。

真紘さんも流石に来てないよね……と、グラウンドの奥を確認するが、誰もいない。

ほっと胸を撫で下ろした瞬間、後ろから、頭をぼんと撫でられる。

「……………!？」

びっくりして、振り返ると、真紘さんが、にやっと口角を上げて立っていた。

「ひより、体調良くなったのか？」

「……………ゆりから聞いたんですか……………？元氣になりました……………」

「まあな。サークル来るの久しぶりだろ？」

「そうです……………真紘さんたち、こんな早くから練習してるんですか？」

「いや、暇だったから、自主練しにきただけ。ひよりは？来んの早くね？」

「……………サークル来るの久しぶりなので、早く来て、体動かそうかって」

「……………じゃあ、一緒に練習しようぜ」

返事も聞かず、手首を掴んで、グラウンドに連れていかれる。

「ちよっ……………真紘っ、さんっ！」

「準備運動するぞ」

さっさと靴を履き替えて、準備運動を始める真紘さん。  
真紘さんのファンの女の子たちきたら逃げよう……………！  
そう心に決めて、真紘さんと一緒に準備運動をする。

「よし。じゃあ、パス練習からな」

「……………はいっ……………」

真紘さんに引っ張られてきた時は、かなり気分が沈んでいたけど、いざ、ボールを目の前になると、テンションが上がる。

久しぶりに蹴れるー！

「つと……………いきます！」

「おー」



ピタッと足元に蹴ってくる真紘さん。やっぱサッカーうまいなあ……。

「ひよりは、左にボールがくると少し軸足がずれる癖あるな」

「えっ……そうなんですか……!? 確かに、左にきたボール、いつも上手く蹴れない……」

「左にボールがきたら、もつとこつちに足ずらすと良い」

自分の知識を惜しみなく披露してくれる真紘さん。

ちゃんと関わると、怖くないし、優しいかも……。

でもっ……いつも女の子にベタベタされて、ツンとしてるし、女遊びすごいって噂だし……  
ダメダメ！今は余計なこと考えないでサッカーに集中！

「はあ……はあ……久しぶりにボール蹴るの気持ちいい……」

バタッと芝生に倒れると、真紘さんも横に寝転んでくる。

「あんま、無理すんなよ。病み上がりみたいなもんだから。ひよりって一人暮らしだっけ？」

「はあ……………ふう……………そうです」

「何かあったら、俺を呼べよ」

「……………へ？」

どういうことかと深く聞こうとしたが、女の子のキャピキャピ声が聞こえてきて、急いで、真紘さんから離れて、自分の荷物を置いている場所まで逃げてきてしまった。

「あぶな……………もうちょつとで、女の子たちに見られるところだった……………」

飲み物を飲みながら、サークルのみんなを待っていると、真紘さんはどこかに消えていた。

「あれ？ひより〜！久しぶりじゃん！元気になった？」

一緒のサークルに入っていて、学部も一緒のりんちゃんが後ろから急に話しかけてきて、驚いてしまった。

「ひゃっ……！……りんちゃん！……元氣になった〜！」

「良かった〜心配してたんだよ〜。ゆりちゃんもひよりちゃんいなくて、寂しそうだったよ〜」

「ゆり、寂しがりやだからね〜」

インフルで外に出られない時、ゆりが買い物をしてくれたり、ゆりのお母さんわざわざ作ってくれたご飯を届けてくれたりした。

本当に頭が上がない……！

今度何かご馳走しないと……！

「ひより〜……！やつと復活した〜！」

走ってきて、思い切り抱きついてくるゆり。

「わっ！」

「元気になって良かった！」

「色々ありがとね、ゆり。今度ご飯奢るから！」

「やったー！」

「てか、ゆり。真紘さんに、私がインフルになったこと話したの？」

「うん！だって、ひより〰週間もサークル来てなかったじゃん？真紘さん心配して、ひよりは？ひよりは？ってしつこかったからさ」

「そ、うなんだ……………」

真紘さんが、サークルに來ない私のことをゆりに聞いていたなんて…………。

さっきの真紘さんとの練習を思い出して、もしかしたらと浮かれそうになるが、首をぶんと振って、煩惱をかき消す。

そんなわけない！

「ふぁ…………おはよ、ひより」

「おはようございます……………！今日は、シュート教えてくれるんですよね？」

「あぁ、ひよりのリクエストね」

あれから、毎週のようにみんなが来る前に真紘さんにサッカーを教えてもらうようになっていた。

私がやってるのはフットサルだから、動きや、ルール、違うところばかりだけど、ボールの扱い方は勉強になる。

真紘さんに教えてもらうのが楽しくて、いつからか、早くこの時間にならないかなーなんて考えることが増えてしまった。

それに、たくさん話して、関係が深まると、よく笑ってくれるようになった。

他の女の子には見せないような顔を私にだけ見せてくれていたみたいで、勝手に特別感を感じてしまっていた。

「来週は何したい？」

「来週……………あ……………」

「ひより？」

「来週から試験あるので、当分サークル来られないんですよ……………」

「あーそういえば、そんな時期か。忘れてたな」

「忘れてたって……………真紘さんは余裕そうで羨ましいです……………」

「ひよりは一生懸命勉強しないと、単位取れないもんな」

右側の口角をキュッと上げて意地悪な顔で笑う真紘さん。

「ひどいです！」

「そんなぶんぶんすんなよ」

そんなこんなで試験期間に入ってしまった、毎日、ヘトヘトになりながら、勉強した…………。

「やっと終わったー！ゆり！サークルいこつ……………！」

「はぁ……………疲れた……………。なんとか単位は落とさないで済みそう……………」

試験に疲れ切ったゆりの手を引っ張って、久しぶりにサークル参加をしたのだが、相変わらず、女の子に囲まれている真紘さんを見つけてしまう。

「久しぶりに真紘ファンの女子、すごいわ……………」

隣で、少し引いた目で見ているゆり。

今まで、何も思ってたなかったのに、久しぶりに女の子に囲まれてる姿を見て、少しもやましてしまう。

「……………すごいね……………あ、陸さんじゃん」

「陸のサッカー見るのも久しぶりなんだよねー！あ、そうだ。ひより、今日はさすがに、何も予定入れてないよね？」

「……………？……………うん。試験終わりにバイトとか入れたくないし、サークル来る予定だったから、何も入れてないよ？なんで？」

「良かった！試験頑張ったご褒美に、陸と真紘さんがご飯ご馳走してくれるらしいから、行こー！」

「……………ほんとっ……………！わーい！」

「……………」

ゆりが無言で見つめてくる。

「な……………なに？」

「真紘さんいるから、絶対断つてくると思った……………。無理やり連れてこうと思ったたのに、すんなり喜ぶなんて、真紘さんと何かあったでしょ？」

「……………ゆりには、試験終わってからちゃんと話そうと思ってただけ……………インフルで体調崩した後から、みんなが来る前に、真紘さんにサッカー教えてもらってたんだよね……………」

「え……………まじ……………！？二人きりで……………！？？」

「うん……………」

「で？どうなの？あんなに苦手苦手って言ってたじゃん？好きになっちゃった？」

ニヤニヤしながら面白がって聞いてくるゆり。



「好き……とかじゃないし！あんなに女の人にベタベタされて、無抵抗な人……やだ……..  
しかも真紘さんみたいに、基本女の子に冷たい人と関わったことないし……」

「はいはい……気になってるのね！もう、ひよりは、わかりやすいんだから！」  
「なっ……んでそうなるのっ！」

急に真紘さんたちとご飯にいくことになって、フットサルの休憩中、思わず、真紘さんの方を見てしまう。

練習の終盤に、ふと、真紘さんの方を見ると、ぱちつと目が合ってしまった。

真紘さんは、目を逸らさず、ほんの少し口角を上げて笑ってくれて、不意打ちすぎて、頬を赤く染めてしまった……。

「あー！真紘さんで見つめ合ってたでしょー！」

「ちよつと……ゆり！そんな大きな声で言わないでよっ！」

「なんで？」

「真紘さんのファンにバレちゃうでしょ……！」

「そんなの気にしない」

練習中も、真紘さんを見つめてる女の子がちらほらいるので、ゆりに大きな声で見つめ合ってたでしょと言われて時は、焦った。

そんなこんなで練習を終えて、近くのコンビニ前待ち合わせになったので、着替えて、ゆりと向かう。

「お、きたな」

先にコンビニへついていた陸くんが、先に私たちに気がついて、いじっていたスマホをしまつて、声をかけてくれる。

「お待たせー！」

「すみませんっ！着替えるのに時間がかかっちゃって……」

いつも通り、体の大きな陸さんの腕の中にぼすんと飛び込んでいくゆり。

「俺らもさつきついたばっかだから気にしないで。ゆりもひよりも試験お疲れ様。真紘がコンビニで買い物してるから、もどてきたら行こっか」

「本当にご馳走してくれるんですか？」

「うん。二人とも試験頑張ってたからね」

「やったね、ひより。いっぱい食べよっ！」

買い物を終えた真紘さんが、コンビニから出てくる。

「わり、待たせた？」

「私たちも、さつき来たばっかです。ね？ひより」

ニマニマ嫌らしい顔で見てくるゆりに呆れてくる。

「う……………ん」

「試験、お疲れ」

まるでいつもしてるかのような雰囲気で、頭をポンと叩いてくる真紘さん。  
久しぶりに、真紘さんのこと近くで見た気がする……………。

なんか、いつもよりかつこよく見えてきた……………ってダメダメ！

「じゃ、いくかー」

陸さんがお店を予約してくれたみたいで、みんなでついていく。

真紘さんたちの大学から近くて、ゆりと行ってみたいね、と話していた肉バルを予約してくれてたらしい。

嬉しすぎる……………！

真紘さんと陸さんは何度か来たことがあるらしく、ゆりがリクエストしてくれたらしい。  
ゆり、ありがとう……………！

「ふー、食ったな」

「お腹いっぱいだねー！」

「もう、最高に美味しかったです……!」

「ひより、俺の肉も食べてたぞ。食い過ぎで、腹はち切れちまうんじゃないか？」

真紘さんにそう言われて、一瞬焦ったが、意地悪な顔をしていたので揶揄われたのだとわかった。

「え………!う、嘘付かないでくださいっ!……!そんな、食べてないです!」

お酒も飲んで、そんなに強くない私とゆりはほろ酔い状態。

「カラオケ行こー!」

「いこー!」

ゆりも私も酔うと気持ち良くなって、よくカラオケに行きたがる。全然酔ってない、陸さんと真紘さんを連れて、いつもくるカラオケに来ていた。

「ひより、酔っ払うと、こんなひつつき虫になるんだな。さっきからゆりにべったり」

「んね。まあ、ひよりなら、いいけど、他のやつがゆりにベタベタしてるのはやだなあ」

「相変わらず、嫉妬深いな、陸」

「真紘だって、ひよりちゃんのこと相当気に入ってるみたいじゃん」

「最近、ようやくひよりが、俺のこと意識し始めてくれたみたいで、可愛くてやばいな」

陸さんと真紘さんがこんな会話をしている間に、なんの歌を入れるかゆりと迷っていた。曲を決め終えて、ゆりと隣同士で座ろうとしたら、真紘さんに手首を引かれて、隣に座らされる。

「きゃっ……………何するんですかあ……………」

「ゆりは、陸の隣座らせてあげたほうがいいんじゃないか？酔っ払って、陸に甘えたいかもしれないだろ？」

「む……………確かに……………」

ゆりも私もかなりお酒が回って、気持ちいい状態。

「甘えたいなら、俺にベタベタしたらいいだろ？」

「やれすっ……………」

「……………なんで？」

「だって、真紘さんは……色んな女の子にベタベタされても、無関心で冷たいもんっ……………同じことになりたくないし……………」

「ひよりなら、いっぱい甘えさせてあげるよ」

耳元で低い声で囁かれる。

背中がぞくぞくと震える。

「うーそっ！真紘さんの嘘には騙されないもんっ……………」

「もんって、可愛すぎだろ。あんま可愛い顔すると、襲うぞ」

「真紘さんが、襲うとか言ってる」

もうかなり酔ってて、好き勝手喋っている気がする。

「好きじゃなきゃ、わざわざ二人きりでサッカー教えたりしないだろう？」

「真紘さんの好きなんて信じられないもんっ！」

「……なんで？」

「いろんな女の子にああやって教えたりしてるんでしょ！いっぱい遊んでるって聞いたことあるし……」

「どこからそんな噂出てんだよ……」

「いっつも女の子にベタベタされても、嫌がってないし……」

「あー、嫉妬で、いやいやしてるのか」

「ふんっ……」

「じゃあ、今から、ひよりの体全身、いっぱい舐めて、尽くしたら信じてくれるか？」

「………なにっそれっ………！」

「女にベタベタされても無関心な男が、ひよりの体に執着するんだとしたら、信じられるだろう？」

「………」

「顔真っ赤、かわい………ひより可愛すぎて、我慢できないわ………俺の家に連れて帰



ろ」

手を絡められ、ベロベロのゆりを抱っこした陸さんに、真紘さんが先に出る、と伝えた。

「真紘、ちゃんと大事にしろよー」

「おう」

ふわふわで気持ちいい……………。

「俺の家、ここからすぐだから、近くのコンビニ寄ってから行こっか」

「……………ほ、んとにするんですか……………」

「するよ。ひよりが、信じてくれるまで、いっぱい気持ち良くからな」

近くのコンビニで慣れた手つきで、コンドームや、飲み物、お菓子を買う真紘さん。

「これ、ひよりが好きなやつだよな」

「なんで、知ってるんですか……………!?!」

「この前、一緒に練習してた時に言ってただろ?」

あんな他愛もない会話で出てきたお菓子の名前、覚えててくれたんだ……………。

深く関われば、関わるほど、真紘さんの優しさに気づいてしまって、どんどん沼にハマっていつている気がする。

コンビニからい分ほど歩いて、立派なマンションの中に入っていこうとする真紘さん。

「え……………真紘さんのお家ここですか……………?」

「そうだよ。ここの20階」

「おっきい」

いいなり!こんな綺麗で大きなマンション、私も住んでみたいよ!

立派なマンションを目の前にして、テンションが上がってしまい、これから何をするのかを忘れてしまっている。

「わあ〜！夜景だあ〜」

「夜景にテンション上がってるひより、おもしろ……………こっちおいで、ひより」

黒基調で、整頓され、シトラスのすっきりした香りに包まれている真紘さんのお家。いつの間にか、シャツ姿になっていた真紘さんの色気にさらに酔ってしまいそう。コンビニで買った水を、わざわざペットボトルを外して、渡してくれる優しさにも、きゅん……………。

「お水いっぱい飲んで、二日酔いにならないようにしないな」

「ん……………お水、美味しい……………」

ペットボトルの蓋を閉めた瞬間、お姫様抱っこされて、寝室に連れていかれる。

「きゃっ……………！！」

寝室も黒基調で統一されていて、おしゅれ。

ベッドを見た瞬間に、これから行われることを想像して、下腹部がキュンと疼く。  
ベッドにぼすんと寝かせられて、真紘さんが上に跨ってくる。

おしゃれなオレンジ色の電気が付けられていて、雰囲気のエッチ……………。

「……………暑いな……………」

着ていた「シャツを脱いで、上半身裸になる真紘さん。

あれ？こんなにムキムキだったわけ……………？

隣で練習している時、着替えて遠くから見たことはあったけど、こんな近くで見るのは初めて。

無駄な脂肪がなくて、綺麗な筋肉……………。

「どうした？俺のことそんなに見つめて。早く触って欲しくてたまらなくなっただけ？」

ニヤッと笑う真紘さん、色気ありすぎてやばい……………。

「ん……………」

酔いが気持ちよくて、ふわふわ笑いながら、真紘さんを見つめる。

「なにその反応、かわい……………」

真紘さんの顔がアップになって、自然と唇を奪われる。

「んっ……………ふっ……………♡」

酔っているせいか、軽く唇が触れるだけでも気持ちいい…………。

ハムハムと唇を何度も噛まれ、甘い声が出てしまう。

どんだんキスが激しくなってきた、息が苦しくて、軽く口を開けた瞬間、温かい舌が口の中に入って、舌を絡めさせられる。

「んっ……………！ふっ……………んあっ……………んっ……………♡」

……ちゅづ……クチュ、ちゅづ……ちゅぐづ……ちゅづ

真紘さんの舌が、上顎側を優しく舐め、激しく私の舌に絡めてくる。

「はぁ……ひよりの唾液、あまつ……」

口の端から唾液が溢れそうところで、真紘さんがごくつと喉を鳴らして飲み込んでしまった。

「やぁ………飲んじゃ……だめっ………」

「なんで？溢れたらもったいないだろ。こんなに甘くて、美味しいのに」

親指で口の端を拭いながら、獲物を捕まえるような雄の表情をする真紘さん。

「ひよりも俺の唾液飲んで」

そう言って、また舌を絡める激しいキスをされる。

「んっ…………ふあああづ…………んっ…………ふう…………♡」

キスしながら、器用に私の唾液を飲み込む真紘さん。

「ひより」

鋭い目で見つめられて、思わず、ごきゅつと喉を鳴らし、口に溜められた唾液を飲み込む。

「ん、上手」

唾液を飲み込んだ途端に、甘い表情に変わり、ぽんぽんと頭を撫でて褒めてくれる。

「一瞬でトロトロな目になったな。ひよりは、俺の予想通り、ド＼な女の子みたいだな」

「ド……えむじゃないっ……………」

「唾液飲めって言われて、素直に従っちゃうし、褒められて、目トロトロにしてるだろ？」

「そ……………これは……………」

「素直になれない悪い子だな。ひよりの体がどれだけド＼なのか、教えてやるよ」

真紘さんの顔が耳、首元へ移動していき、肌に柔らかい舌を当ててくる。

ワンピースを少しずらされて、鎖骨の敏感なところを、舌でレロつと舐められて、体をビクッと震わせてしまう。

「んっ……………ふう……………♡」

「服脱ごうな」

グッと体を起こされて、簡単にワンピースを脱がされてしまう。

今日は、白にピンク色の刺繍が施された、ガーリー系の下着。



「ひよりの下着姿、エロくて可愛い」

首、鎖骨、胸を舐められながら、背中に手を回されて、簡単にブラのホックを外される。

「きゃうっ……………」

「ひよりの乳首、まだ触ってないのにぷっくり勃ち始めて、触ってって訴えてるみたい。今から、いっぱい舐めて、乳首おっきくしてあげるからな」

流石に恥ずかしくて、隠したかったが、手首を押さえられてできなかった。  
私の乳首をじっくり観察した後、乳輪を優しく舐めてくる真紘さん。

「んんっ……………♡……………ふぁぁぁ……………♡」

乳輪を舐められれば、舐められるほど、先端がじくじくと疼く。

「ここ、舐めて欲しいなら、舐めてって言って」

「ん……………♡……………やあ……………そんなことっ……………言いたくっ……………  
ないっ」

「じゃあ、ずっと、乳首の周り舐めるだけな」

「え……………」

真紘さんに、乳首舐めてほしいなんて、恥ずかしいこと言えないっ……………！  
どんなに目で訴えても、真紘さんの舌も指も先端を弄ってはくれない。

乳輪を撫でられるたびに、先端の疼きが蓄積されていき、頭がおかしくなりそうになる。  
欲しいっ……………乳首、いっぱい舐めてもらって、気持ち良くなりたい……………！

真紘さんにバレないように、上半身を少しずつ動かして、舌と指が乳首の先端に当たる  
ようにじわじわ移動していく。

「こゝら、ちゃんとかわないと、乳首弄らないって言っただろ？ずるしようとするな」

「あうっ……………ふっ……………うう……………♡……………」

「ひよりが、素直に乳首舐めて欲しいって、言えたら、いっぱい舐めて、指でコリコリして  
あげるのになあ？」

「ふっ……………ふう……………」

乳首舐めてって、言えたら、いっぱい虐めてもらえるっ……………!もうっ……………もうっ……………我慢できないっ……………。

疼きに耐えられなくて、思わず、真紘さんを見つめて、おねだりしてしまう。

「んっ……………ち、くびい……………触ってっ……………欲しいいっい」

「……………いいよ。自分の口でちゃんとおねだりできたから、ひよりがもう無理ってなるまで、虐めてやるからな」

真紘さんの口の中に乳首が消えていき、じゅっと強く吸われる。

「んあああぁづ……………♡……………気持ちいいいづ……………♡乳首づ気持ちいいい……………♡」

疼いていた乳首をようやく刺激された、気持ちよさで、おっきな声が出てしまう。

気持ちよくて、頭が真っ白になる。

片方は、真紘さんの舌で、レロレロ虐められて、もう片方も、指でぎゅっと摘まれ、コリコリと刺激される。

「だめえっ……♡……乳首っ、いっぱい虐めるのだめっ……♡」

「だめ？なんで？」

「気持ちくっ……おかしくなっちゃうからあ……こんな、乳首気持ちいいのっ  
しらないっ……」

今までで感じたことが、ないくらい気持ち良すぎて、混乱して、涙が出てくる。  
でも、怖いわけでも、痛いわけでもない。

「おかしくなれよ、俺しか見てないんだから。ひよりが、気持ち良くておかしくなる姿、見  
たい」

じゅっと吸われて大きくなった乳首は、いつもより、濃いピンク色になってて、エロい……。

自分の乳首を見て、さらに興奮してしまうなんて……………。

「ふっあああ……………そんなにつ…………吸っちゃだめええ…………♡」

「ここも、期待して、濡れ濡れだな」

真紘さんの手が、いつの間にか、おまんこを下着の上からヌコヌコと撫でている。

「ふあっんんづ……………!!!!」

舌を絡める深いキスと、乳首責めでたっぷり濡れたおまんこは、真紘さんにほんの少し撫でられただけで、ぐちょぐちょと恥ずかしい音を立てる。

「ひよりのおまんこからいつぱいエッチな音してるな？」

「やつ……………ああっ……………はずかしいい…………♡……………!!!!!!そこっ……………!!」

布越しに、興奮して腫れ始めたクリトリスを軽く擦られて、ビクビク体を震わせてしま

う。

「クリ弄られて、ビクビクするのかわいい……………」

乳首をじゅつと吸われながら、おまんこを擦られて、イキたいという疼きがどんどん募っていく。

「んううづ……………♡ふっ……………うう……………♡」

おまんこ……………もっと弄ってほしい……………。  
イきたいいいい……………！

「んっ……………ふっ……………♡もっとう……………♡」

「ん？もっとなに？」

乳首からちゅぱつと口を離して、おまんこをすりすり撫でながら、意地悪に笑う真紘さ

ん。

ああ、もう我慢できないっ……………！

もつと、クリ弄ってほしいっ……………！

「もつと……………おまんこ、触ってえ……………♡」

「…………興奮して、おまんこ触ってって自分から言っちゃうひよりエロ……………かわいいすぎ、無理……………」

「ふっ……………まひろっしゃん……………」

「はいはい。ひよりが初めて自分からしてくれたおねだりだからな」

ぽすんと、ベッドに寝かせられる。

「ひより、どこ気持ちよくしてほしいんだっけ？」

「ん……………おまんこっ……………」

「じゃあ、俺が舐めやすいように足広げて、おまんこの中見せて」  
「んえっ……………！！」

真紘さんは、じっと私を見つめるだけで、手助けはしてくれない。

おまんこの疼きは一向に治らない。

もう、どうでもいいっ！恥ずかしい姿見られても、真紘さんにおまんこ舐めてもらえるならいいっ……………！

そうだっ……………お酒飲んだせいで全部記憶なくしたことにしよう……………。  
そう決心して、ゆっくり足を開いていく。

「もっと」

「ふっ……………うう……………」

太ももの裏側を持って、顔を逸らしながら、グッと開き、愛液が垂れそうなおまんこを真紘さんの目の前に晒す。

「やっぱドMだな、ひよりは。おまんこじっくり見られて、ヒクヒクさせて愛液いっぱい垂らしてる」



真紘さんの指が、密穴を軽く撫でて、指に愛液をたっぷりつける。

「んっ…………ふっ…………んあっ…………♡」

「上手におまんこ見せられたひよりにご褒美あげないとな」

愛液のたっぷりついた指でぷっくり腫れ始めた、クリトリスを円状に撫で始める。

「んああああっ…………♡そこっ…………クリっ気持ちいい…………♡」

「ひよりは、クリ弄られるの大好きみたいだな。少し弄られただけで、こんな甘い声出して…………」

「クリっ…………こんなっ気持ちいいのっ…………初めてえっ…………♡」

真紘さんの指が、クリトリスの根本から先端にかけて、軽く弾いては、ヨシヨシと、優しく撫でてくる。

強い刺激ともどかしいくらいに優しい刺激を繰り返されて、頭がおかしくなりそう。

「だづめええ……………それっそれっ……………気持ちいいのづ……………きちやうづ……………  
イっちゃやううう……………♡!!!」

真紘さんにクリトリスを弄られるたびに、積もっていった快樂が、弾けそうになる。

「ん？もうイくのか？」

「う……………んづ……………♡イっぐ……………イっくうう……………♡」

ようやく疼きから解放されると喜びながら、体に入力するが、一向に疼きから解放されない。

それもそのはずだ。

下腹部を見れば、真紘さんの指は、おまんこから離れてしまっているのだから。

「なんでっ……………んえっ……………♡」

「ひよりが、自分のことドズって認めたらいかせてやる」

「……………やあつ……………ドΣじゃないっ……………もんづ……………」

「おまんこ見せろって言われて、エロい顔して、おっぱい強く吸われても、クリトリス、ピンって弾かれても、甘い顔してるのに？」

エッチになると、いつもよりドΣになる真紘さん。

真紘さんみたいに、意地悪なこと言ったり、強い刺激を与えてくる人と付き合ったことがなかったせいだけで、本当は、ドΣなのかもしれないと思い始めた。

おまんこ見せろって言われても、本気で嫌だっと思わなかった。  
むしろ、興奮して、おまんこを濡らしてしまった。

でも、今更ドΣって認めたら、からかわれるかもしれないと思ったら、なかなか素直になれない。

「ひよりが、素直になれないなら、もうエッチ終わりな。いっぱい濡れて、イきたそうなおまんこも弄ってやらない」

「やつ……………！！！」

「ん？素直になるのか？」

「なっ……………るっ……………」

「ひよりは？」

「ドΣなっ……………女の子っ……………ですっ……………だからっ……………ここっ……………イきたい  
い……………♡いっぱい触ってええ……………♡」

「あゝ、ひより、可愛すぎて、もっと虐めたくなる」